

[閉じる](#)

現代英米文学特殊講義Ⅱ A

サブタイトル	19世紀末のロンドン ― 都市文学を探訪する
担当者名	大石 和欣
単位	2
年度・学期	2022 秋
曜日時限	水4
キャンパス	三田
教室	353-B
授業実施形態	対面授業（主として対面授業）
登録番号	33052
設置学部・研究科	前期博士課程（修士課程）文学研究科
設置学科・専攻	英米文学専攻
学年	1, 2
分野	修士課程科目文学研究科科目
K-Number	GLT-EL-67213-211-02

[▼詳細](#)

授業科目の内容・目的・方法・到達目標

この授業では、ロンドンを舞台とする複数の19世紀末文学を読解しながら、この時代の思潮や社会がどのようにそこに浮上しているかを考察していきます。

都市空間は必ずしも「リアル」なものとして文学作品のなかに描写されるわけではありません。脚色されたり、誇張されたり、ときには象徴化されることで、虚構を通して同時代の社会状況や政治、思想を反映していきます。それらは空間描写の分析を通して看取することも可能ですが、登場人物たちの移動の軌跡や会話、ときには室内装飾を通して確認することができます。また、虚構内における都市空間は必ずしも構造的に理解すべきものでもありません。実際の都市空間にも歪みやひび割れがあり、そこに生きている人間の存在の根幹に関わる非ユークリッド的空間がその背後の闇に広がっています。都市を舞台にした文学にも、テキストの歪曲やことばの「ひび割れ」があります。それらは脱構築的な虚無につながっているわけではなく、見通すことの難しい深淵な意味を湛えています。それらを解きほぐす鍵を探しながらロンドン文学を探訪していきます。

19世紀末のロンドンには、スラムの深刻な問題があり、それを含めた都市衛生問題もありました。それらとは対照的に政治を司る区域や富裕層居住区では開発・発展も進んでいました。また、とめどないスプロール現象によって郊外化も加速していきます。そこには2世紀以上にわたり海外派遣拡張を目指した帝国イギリスの姿が浮かびあがっていましたし、消費文化の拡大に裏打ちされた商業地区の発展もありました。そうした世紀末における実際の帝都ロンドンの姿を確認しながら、都市文学としての世紀末文学を辿って、文学研究の可能性を探っていきます。

授業では、まず19世紀、とりわけ世紀末のロンドンについて歴史的観点から俯瞰したうえで、都市文学の研究アプローチについて考えてみます。その後、毎回一つの文学作品について世紀末のロンドンとの関係から多様な視点から切り込んでいきます。毎回の授業では対象とするテキストや作品について読解を行い、考察を深めていきます。毎回、事前に決められた発表担当者は与えられたテキストにおける公共圏について考察を提示します。その後、教員やほかの学生からの質疑応答を行い、教員から補足説明と一歩踏み込んだ考察を提供します。

扱うテキストや作品については予習の際には翻訳を使っても構いませんが、授業では原語テキストを用いることにいたします。

文学研究にはさまざまなアプローチが可能ですが、この授業では世紀末文学について、都市空間というテーマに沿いながら歴史的文脈のなかで検証していくことで、文学研究の一つの型とその方法論や技術を学んでいきます。

授業の計画

第1回

世紀末のロンドンを読解する

第2回

都市文学研究というアプローチ

第3回

ロバート・ルイス・ステューヴンソン 『ジキル博士とハイド氏の奇妙な事件』

第4回

サマセット・モーム 『ランベスのリサ』

第5回

ジョージ・ギッシング 『ネザー・ワールド』

第6回

アーサー・コナン・ドイル 『緋色の研究』

第7回

夏目漱石 「倫敦塔」

第8回

ウィリアム・モリス 『ユートピアだより』

第9回

ブラム・ストーカー 『ドラキュラ』

第10回

オスカー・ワイルド 『ドリアン・グレイの肖像』

第11回

ヘンリー・ジェイムズ 『ロンドン生活』

第12回

ラドヤード・キプリング 『消えた光』

第13回

H. G. ウェルズ 『タイム・マシン』 『世界戦争』

第14回

20世紀初頭のロンドン ―― ヴァージニア・ウルフ 『ダロウェイ夫人』/T・S・エリオット 『荒地』

その他

映像・写真等の資料については著作権の問題がない範囲でオンデマンドで視聴可能にしておきます。

成績評価方法

出席と発言・授業態度 50%、発表25%、レポート25%

テキスト（教科書）

とくになし

参考書

最初の授業で総括的参考文献および各回の授業で課題テキスト関連の参考文献を提示する。

担当教員から履修者へのコメント

1学期間ですが、世紀末のロンドンと一緒に旅してみましよう。

質問・相談

質問があれば kazoishi@keio.jp へお願いします。